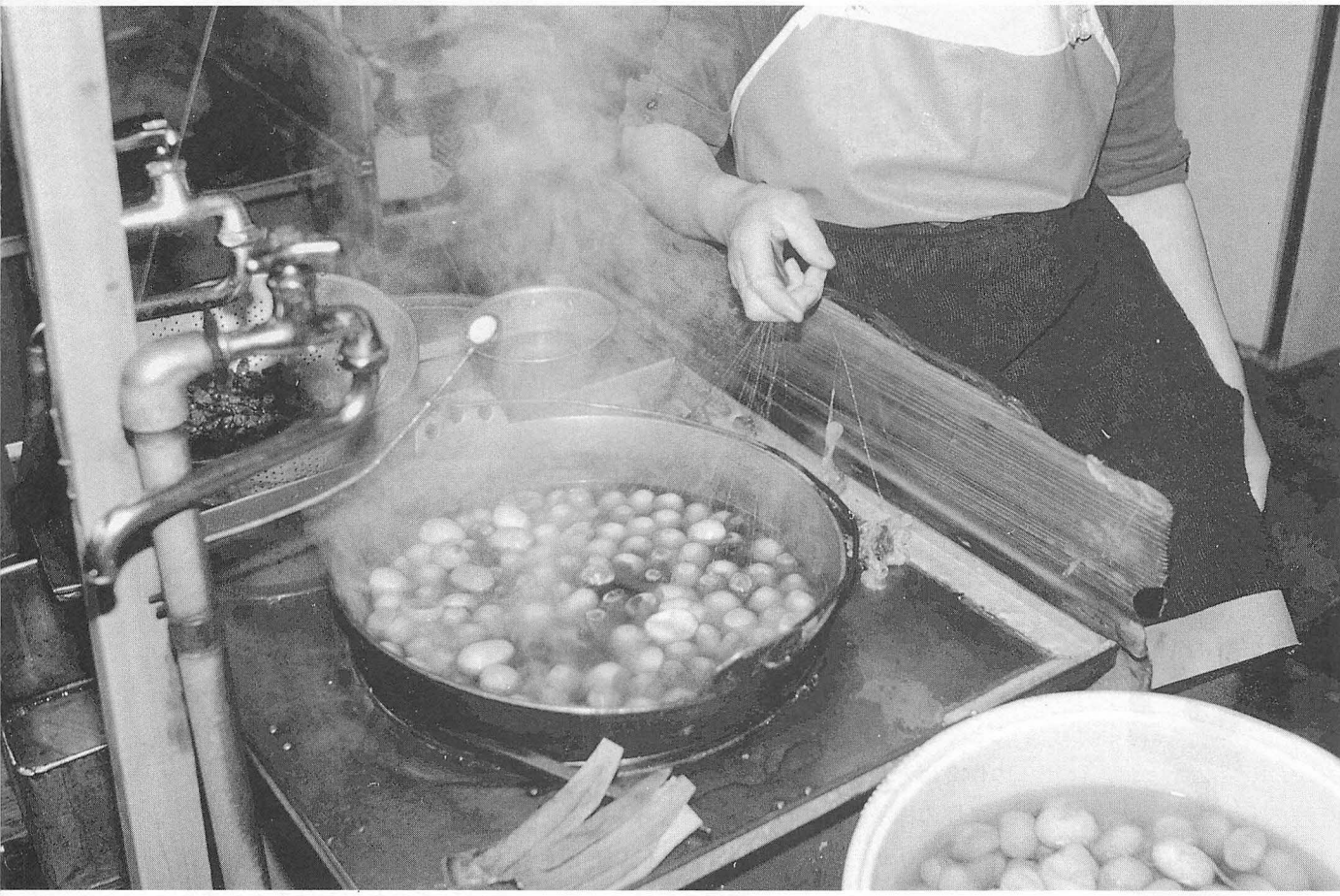
ISSN 0388－4732

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第16巻　第1号



白峰村の牛首紬

長年の歴史を誇る『牛首紬』は、白峰村の代表的な伝統工芸品であり、江戸時代にはすでに特産品として知られていました。昭和初期の頃まで村内で盛んに造られ、その後一時低迷したものの、最近では手織りの良さが見直されて人気が出てきました。

写真は、紬生産の中で『のべひき』と呼ばれる、繭から糸をとりだす工程です。鍋の中で柔かく煮た玉繭（80個前後）から竹へらを使って細い糸を挽き出し、それを１本に束ねて若干のよりをかけて木枠（のべ枠）に取ります。たくさんの繭から糸を取り出し、それを大きさにムラがないようによりあわせるのは、大変な熟練技術を必要とします。

（白峰村桑島の機業場にて）

炭焼きについて考える

畑尾　均

炭窯の天井を造る作業

今から２年前の1986年、粟津温泉近くの山中で泊りがけで炭を焼いていた時のことでした。５日前にすでに窯に火がつき、その日、真夜中の１時を過ぎて精練の作業にとりかかろうとしていました。煙突口の蓋を引き開け、窯の前で横になって煙の様子をみているうちに、うとうととしてしまいました。どれだけたったのでしょうか、ブォーという鈍く低い音と金属的に輝く黄色い光にとび起こされました。火事だー？　一瞬のうちにそう思うと急にひざの力がぬけるのを感じました。でるはずのない大きな炎が勢いよく煙突から吹き出し、幅１ｍもある火柱をつくって小屋のムナギ（棟木）をなめていました。私はしばらくぼう然とそれをながめていたように思います。なんとか気をとり直してバケツの水で消火に努め、小屋の一部を焼いただけで火を止めることができました。

いまでも強烈に記憶に残るこの出来事は、私の炭焼きに対する無知さ加減をぞんぶんに証明してくれたように思います。炭焼きの「炭」とはいったいどんなもので、「焼く（燃焼）」とはそもそもどんな現象なのでしょうか。あらためてこの二つを考えてみると、けっこうあいまいに通してきたことがわかります。

炭の焼き方

炭といっても色々と種類があります。一般の家庭用には、火力がある程度あって火もちもまあまあというナラ・クヌギの黒炭がふつうです。ウナギ・鳥などを焼くときには、一定の低温で燃え火もちのよいカシ類の白炭がもってこいです。そして鍛冶屋や刀剣類の鍛錬には、リン・イオウをあまり含まないマツ類で焼かれた比較的やわらかい黒炭でなければなりません。その他にも特殊になりますが数多くの炭があり、性質もちがえば焼き方（製炭法）もちがいます。ここでは一般家庭用の炭について考えていきたいと思います。

焚火などをする際、はじめ細い小枝か何か火つきのよいものにマッチなどで火をつけ、徐々に太い枝へと火をうつしていきます。しかし実際には火がうつったのではなく、火によって熱を与えているのにすぎません。熱を徐々に与えられた木は、最初白い煙を出し、続いて青白い煙、青い煙となって炎が出るようになります。そして炎がおさまると、跡にオキが静かに燃えていきます。このオキに水をかけると「消し炭」といってザクザクとした軽い炭ができます。つまりオキはすでに炭が燃えたような状態にあることがわかります。

木材に熱を与えると、焚火でみたような煙がでます。白い煙は木材中の水分が水蒸気となって出てきたものですが、青白い煙や青い煙は木材が熱によって分解されたことにより出たメタンガス・水素ガス・一酸化炭素ガスなのです。炎とはこのガスが燃える（酸素と結びつく）現象で、必ず熱を発します。この時点では木材自身にはまだ火がついていませんが、さらに熱せられると木材に着火し燃えはじめます。この時の温度が280～300℃で着火点と呼ばれ、炭焼きにとって重要な温度（時期）です。着火点にまで達した木材は自発的に熱を出しはじめ、外部から熱を与えられなくても燃え続けることができるようになります。さらに温度が上がって450℃付近になると、口火がなくても木材自体が発火するようになります。これが発火点です。これまでのことは木材表面の空気（酸素）が十分ある状態で起きる現象です。ところが木材の内部は酸欠の状態で熱せられていますから、ガスを出しきった結果、煙も炎も出さずに燃えるオキ（炭）ができると考えられます。

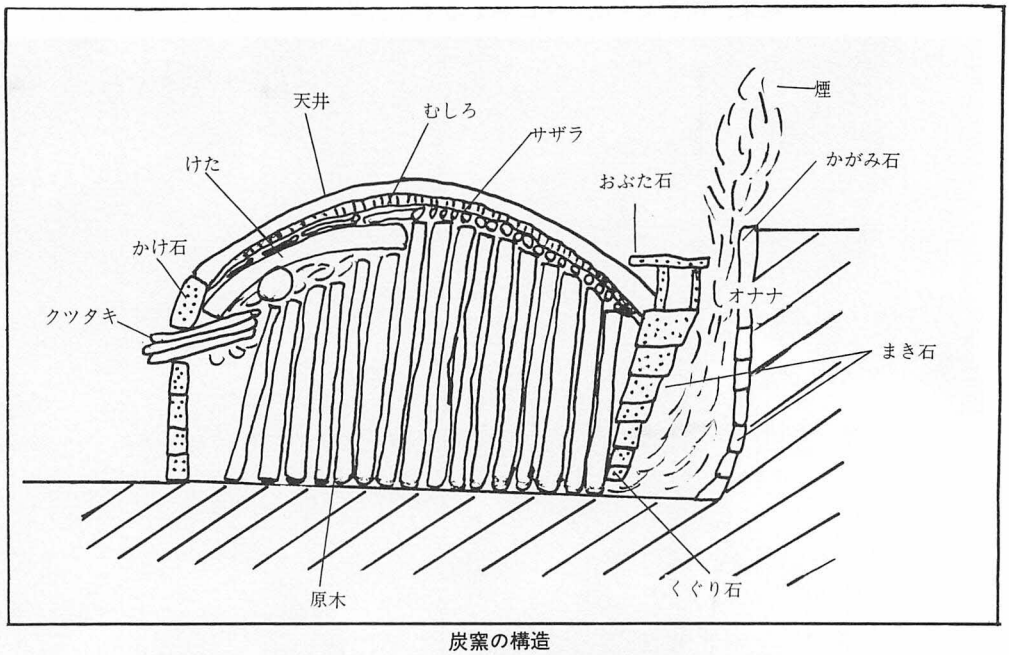
炭窯の内壁

「口だき」と「燻（いぶ）り」

炭窯は外部と完全に遮断でき、容易に酸欠状態をつくりだせるようつくられています。窯内に炭材をぎっしりつめ込み、窯口で火をたきます。これを口だきといいます。口だきは窯全体をあたためるようにしてたき、徐々に温度を上げて炭材の水分をぬいていきます。炭材は太いもので10cmほどありますから、徐々に温度を上げないと内部の水分がぬけず均等に炭化させることはできません。ですからこの口だきに２日ほどかけるのがふつうです。

熱は上部にたまりますから窯の天井の温度が280～300℃に高まると、先ほど説明した着火点に達したことになります。焚火の場合ならここで木から炎を上げて燃えるところですが、窯内は酸欠状態ですので天井付近の炭材は炎をあげて燃えられず燻った状態で熱を出しながら分解していきます。これからは外部から熱を加える必要はありませんから、口だきをやめ、窯口をふさぎ、燻るのに必要な空気を供給する通風口をあけておきます。この通風口の穴の大きさと、排煙量を調節する煙突口の蓋の加減が炭焼きにとって最も神経をつかうところで、たいへん重要な作業となります。

私は最初「燻る」という状態が理解できず相当悩まされました。ましてや炭焼き用語では、この着火点に達した状態をふつう「火がつく」と表現しますからなおのことです。結局私なりにつぎのように理解しました。つまり、着火点に達した炭材は自ら熱を出して分解していくのだから、もう外部から熱を加える必要はないが、酸素の供給をすべて断てば熱分解は進まず、かといって大量に供給すれば発火し燃えてしまう。酸素供給の程度は、炭材が発火することなく自動的に発熱を維持でき、次の反応を起こさせるにたりる必要最小限の量となり、この状態を保てば、発火することなく燃やし続けることができる。これが「燻る」ということであり、炭化させるということではないか、と思っています。炭化期間はその窯の天井の高さ（炭材の長土）によってちがいますが、３～５日ぐらいで窯の天井から底に向かって炭化されます。



炭窯の構造

指導　伊藤常次郎氏　資料作成　加賀市社会教育課

炭の精練

炭化が終わる頃になると、窯内の温度が、これまで一定していたものが急に上昇しはじめます。そして排煙の色が青色から透明に変ると、窯内がうす赤く光ってくるようになります。時間がたつとともに光も強くなり、「精練」の時期を向かえます。前に説明した発火点に達したのです。精練は、炭化期間中の調節ではもはやこれ以上の熱分解が起こらないため、これまで以上に酸素の供給量を増やし、熱分解を促進させてやるために行なわれるものです。この操作により窯内は高温（約800℃）となり、炭材中にまだ残っていた夾雑物をはき出させ、炭質を格段に高めることができます。炭焼きのウデのみせどころはこの精練にあるともいわれます。私が以前小屋を焼きそうになったのも精練期のときでした。また、日本の炭がすぐれているといわれるのも、この精練の技にたけているからに他なりません。精練がおわれば窯を密閉し、数日後に出炭ということになります。

以上炭焼きについて考えてきましたが、実は最も大切なことがぬけてしまいました。それは炭窯の構造についてであります。以前私の炭焼きの師匠である伊藤常次郎氏は「炭はウデで焼くもんやない。窯で焼くもんや」といわれたことを思い出します。炭の質の良否は製炭技術より、窯の構造・材料・立地条件等により決定される面が強いことを適切に表現した言葉で、私もそう思っています。炭窯には「活性」という一つの生きものの様なところがあって、窯の構造が合理的にできていないと、技術が生かされないところがあります。そして構造が合理的とは当然炭化の状態にからんでくることですし、このことを考えないわけにはいきません。

昨年の暮に私はやっとのことで炭窯を完成させました。その構造は私なりに悩みに悩んで資料などを参考に考えたものですが、残念ながらまだ一度も炭を焼いていません。今後この炭窯で好調に炭が焼ければ、何かの機会にその構造をお知らせしようと思っています。

（金沢市在住）

炭窯の外観

白山麓住民の自然観を追って

広瀬　鎮

吉野谷村中宮の野生ニホンザル

サルの変化に驚く

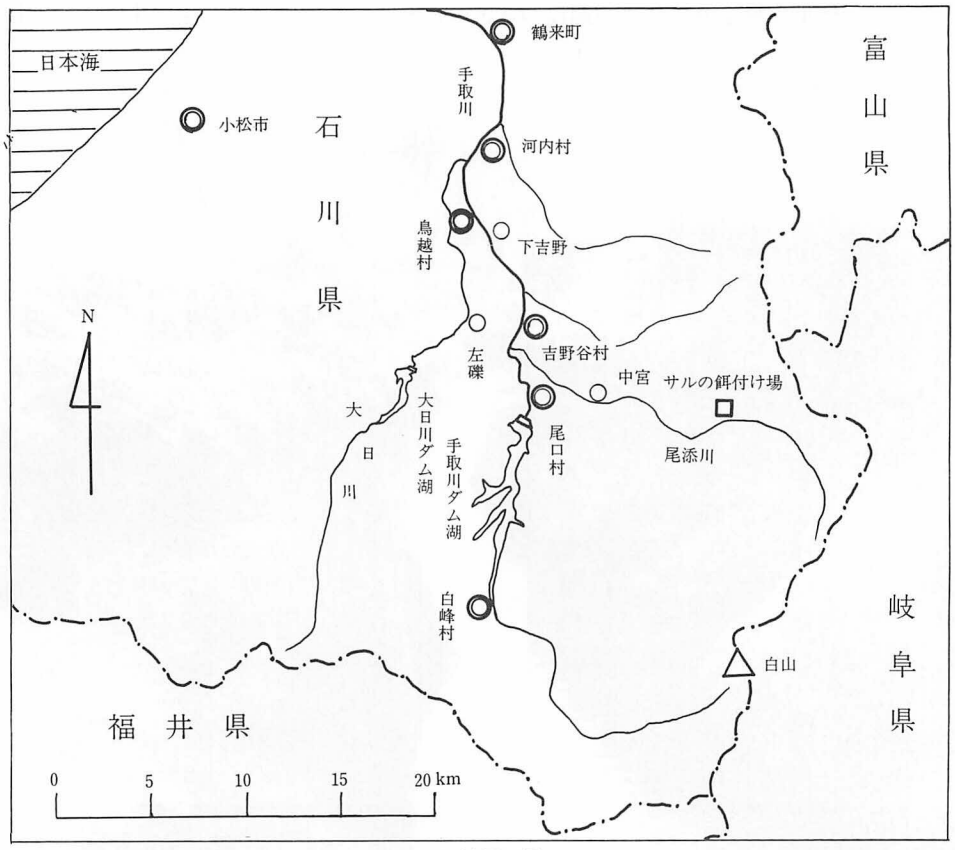
昭和63年３月、鳥越村役場の和室会議室に村内の有識者に集まっていただき、ニホンザルに関する民間伝承を収録していた。神社に残されている幟（のぼり）の由来や、そこに描かれている絵についての島田音近さんの話がはずんでいた。同席していた同村左礫に住む広川克さんは、長年の狩猟経験があり、森の生きもののことを良く知るベテランのお一人である。９年前には、左礫において同じ人から、その昔、村にやってきた野生ニホンザルの話を聞いたが、あとになって『サル撃ち』の話が含まれているのに気がついた。今回も、広川さんは突然に、『こん頃じゃ、サルは賢うなっとるがね。全然人を怖ろしがらんようやし、人に出会うても、堂々として逃げもせん。』といってあきれている。鉄砲を撃つことを止めた広川さんの目の前を、サルは悠ゆうと横切って姿を消したというのである。かつては人目を避け、人を見ればさっと逃げるニホンザルを見なれた者にとっては、やはり驚きである。野生の生きものたちも、主として人間との関係の変化からくる生息環境の変化とともに、その行動様式を少しずつ変えてきている。

筆者はこの20年近く、白山麓に住む人たちの心の中で、野生動物がどのように受けとめられてきたのかを追ってきた。白山の自然保護のための基礎調査として、多くの方々の話を数多く聞いてきた間にも、自然界の生きものたちはずいぶん変ってきたと、強く感じている。ここでは、これまでの白山麓の人びとが抱いている自然に関する認識や知識の中から、人びとの動物観の推移を紹介してみたい。

形に残らない人びとの心

近年の白山麓山村の経済的、社会的変化は、そこに住む人たちにとってもめまぐるしいものがあった。戦後の急速な物質文化の進展と価値観の変化は、筆者自身山麓へ出かけるたびに見聞きした。薪からプロパンへ、自転車からマイカーへ、衣食の多様化とインスタント化、電気洗濯機とテレビの普及など燃料・交通・衣・食・住にわたる技術革新の波は、人びとの暮らしを変え、画一化をもたらした。それまで長い間伝えられてきた村むらの習俗をも変えようとしていた。経済の高度成長に対応した国土開発、ダム工事、森林開発は、山麓の自然環境に様ざまな影響を与えてきた。そのような変化の中で、豊かな自然環境の指標動物であるニホンザルなどの野生動物たちの生息状況も、当然のことながら大きく変化してきた。人と自然との係わり、生きものと人とのやりとりなどを調査してみると、村むらに古くから伝わる伝承も、動物たちの減少とともに消滅しつつあることが次第にわかってきた。

幸い、村史をいちはやく刊行した村の中には、民俗資料館などを建設したところもあり、地域の生活資料を文化財として後世に残そうと努力している。だが、人びとのものの考え方や、自然に対し抱いたであろう感動など、生活認識そのものはほとんど記録にとどめられていなかった。民具は確かに『物』として私達に教えてくれることも多いが、人びとがいかなる価値観をもって、それぞれの『物』を作り、使っていたのかは、明らかでない場合が多い。そうした生活観念こそ、今のうちに記録しておかなければならないことだと思っている。



白山麓周辺図

サルをめぐって

『白山麓には猿の話はないなあ。』。これは、石川県立図書館で行なった猿の民間伝承の研究会での席上で、河内村の上山秀之さんが最初に発した言葉であった。ところが驚いたことに、直接白山麓の村に出かけていって、山や畑で働く人にお会いして聞きだすと、多くの伝承がそこには残されていることがわかってきた。金子有斐の『白山遊覧図(1785)』はサルたちの遊動と降雪とに係わった記録であったし、出作りの時代からサルたちに悩まされてきた人びとの間には、サル退治の話が残っていた。

吉野谷村中宮の外一次さん（故人）は、ニホンザルとの深いつきあいを通じて、野生動物のもつ自然予知能力などにも深い関心を持っていて、沢山のことを教えていただいたものである。同村下吉野の山本重孝さんは、神社の旗の裾にサルの形をした縫いもの（一般的にはククリザルと呼ばれる。）を下げ、村むらによって『ホカボウ』、『サルボウ』、『ホゥカ』、『サルメイ』、『ヒィヒィ』などと呼び名の違うことに特に強い関心を寄せている。河内村内尾では、古くなったものを近年、立派なものにつくり変えたといわれていて、語りの中のククリザルは、今も生きていた。老婦たちが「針の手」（裁縫）の上手になることを、ククリザルに託して祈願した伝承や、女の子が背中に負って遊んだ『サルボボ』（飛騨地方の呼びかた）は、日本の各地に広がっている民間習俗の一つであった。

中宮の林与享・のぶさんから聞いた白山ザルは、いつもとげとげしく人間とぶつかり合っていたとは限らなかった。また、かつて食用や薬用となっていた動物たちと白山麓の人びととの交流のなかに、野生動物と接することによって生まれた山村独特の生活文化があったのである。

山仕事や発電所の仕事の間につきあったサルたちのことは、生き生きとした伝承となっ

「猿鏡」の伝承を今日に伝える黄門橋よりみた手取川（吉野谷村下吉野、鳥越村釜清水）

て継承されていた。さまざまな情報を伝えてくれたインフォーマント（情報提供者）は、地域ごとに異なる自然や生活環境のなかで育ち、それぞれ独自の自然に対する見方を形成していたのである。時として、広く他の地方と同様のサルの伝承に接し、驚かされたこともあったが、インフォーマントたちが青年期に村外で就業した時に学び、後年村にもち帰ったものもあった。下吉野のように稲作を進めた地域では、もうサルの話など残されていないはずなのであるが、何と昭和63年の聞きとりで“囲炉裏のナベの粥に手を出し、熱くて食えなかったサルが、腹だちまぎれに灰をつかんで粥の中へいれて、それをかきまぜ、人が食えないようにした。”という昔話が収録されたのである。このような話からも、昔の人のサルへの思いの一端をしることもできた。

薄れる自然への関心

山村の都市化、近代化は、人びとの物への思いや自然観を変質させて行く。情報化、映像化のマスメディア時代の到来は、人びとの知識を豊かにはする。しかし、自然との接触機会が減ったことからくる心のひずみや寂しさは、全くないといえるだろうか。“昔は確かにアバレ川だったが、美しかった。今は汚なくなってしもうた。”最近、大日川や手取川流域の人びとが、しばしばこの言葉を口にする。

尾口村、白峰村などで住民の自然認識をさぐってみると、そこには、やはり急激な環境変化をあやぶむ声が多かった。サルたちの姿が絶えて久しい白峰では、ヒトリザルが現われようものなら、それは大へんな騒動となりかねない。学校周辺に現われたヘビも、今では話題の一つともなる。キツネたちは、家庭からのゴミ収集処理の行きとどいた今日では、残飯あさりが出来なくなってしまった。生きものたちの消長は、村の生活の変化と深く係わっているのである。白山麓の生きものたちは、人びとの生活とも結びつき、環境指標にもなっていたようである。

左礫のククリザル

山麓の自然の変化は、近年の開発進行のなかにあって、次第に人びとから自然接触の機会を奪って行く。人びとの自然への関心の低下は、子供たちの遊びの変化にもみられ、大人たちはそれを深く憂える。川遊びの豊かな体験をもつ老人たちは、子供たちの間で、魚の名や、魚とりの技術がすたれるのがさびしくてならない。現代っ子に、長年伝えられてきた遊びなどが伝わらないはがゆさは、大人たちの間で拡大するばかりである。今では、集団で山や川で遊ぶことはなくなり、ひとり遊びにふける子供たちに、大人たちは危惧の念を抱いている。白山麓の人びとの自然観、自然認識を探っていると、大人たちのこの思いは、筆者にもひしひしと伝わってくるのである。

長年にわたって、白山麓の自然と係わった生活文化に関心を抱いてみると、村の経済発展の施策のなかに、自然・歴史・文化への鋭い問い直しがなされていることに気づかされる。村おこし、地域文化のみなおしが叫ばれる今日、やはり、重要なことの一つは、村人の自然に対する態度や言葉の正確な記録であろう。住民一人一人が育ててきた自然観が、文化として大切にされる時代がやってきているのではなかろうか。白山麓のニホンザルの伝承収録から始まった筆者の調査活動も、自然への深い関心をもつ数多くのインフォーマントの方がたのおかげで、興味深い自然認識の記録を、今日まで収録しつづけることができた。そこにあったものは、「生きものを知り自然を知る豊かさ」に他ならなかったのである。

はじめての聞き取りから、すでに20年が経ている。山や川に寄りそって暮し育った人びとの自然観は、生活のなかに、地域の長い歴史のなかに形づくられてきている。今、あらためて昔話をたどってみると、村の環境が、湿から乾へ、陰から陽へ変化する中でも、村人の心のなかに、かつて育まれた自然観が姿をあらわしてくる。村の年寄りたちは今、昔話や遊びを幼児たちに伝えている。この試みは、今も豊かな自然に囲まれた村での、新しい自然観の形成にきっと役立つに違いないと考えているものである。

（名古屋学院大学）

村からゴミ捨て場がなくなり、キツネが近よれなくなる。

白山の思い出

――中西悟堂先生らと共に――

木村久吉

第２回白山調査参加者―白山室堂にて昭和30年７月２日

はじめに

昔のフォード社製自動車では、後座席の前に長椅子を置けば子供３人くらいがよけいに乗れた。運転席、助手席の後背半ば下にとりつけた板を倒すともう、３人が座れることになっていた。現在の特急列車の前座席にとりつけた背板を折り返すとチャブ台になる。あれ式である。

北陸鉄道金名線を白菊町（当時）、野町ないし西金沢の各駅で乗った白山登山の私達は、白山下から、またこの車１台に20人近くギュウギュウ詰めさせられて市ノ瀬まで運ばれた。ところが白峰村の牛首がほどなくの所でたいてい降ろされた。例年のように途中は崖崩れで道は埋まっていた。白峰からの右岸に仮道がつくられ、へとへとになって市ノ瀬へ着いたこともあった。私がこのようにして白山登山をしたのは昭和15年から、道路事情が良くなった30年頃までであったろう。敗戦前後の19～21年を除いては、それでも毎年、白山に登っている。このギュウギュウ詰めがいやで、18年夏には友人と白山下から一日かけて市ノ瀬まで歩いた。帰山の市ノ瀬旧道とともに最も印象が深い登拝行であった。私はこれまで、昭和20年代～30年代にかけて合計４回ほど、『日本野鳥の会』創設者の中西悟堂先生の白山調査行に御一緒したので、その内３回をここで紹介する。

第１回白山調査行———昭和22年

東大の本田正次教授(故)に植物分類学の講義を聞かせてもらっていた昭和22年、白山の調査行のことで相談があった。石川博物学会（金沢高等師学校教授、清水幸忠先生ら）のお世話で、地元は石川師範、金沢医大附属薬専などの先生、生徒ら90名ほども参加の大部隊の登山行になった。中西悟堂（日本野鳥の会会長)、名和正男（名和昆虫研究所長)、岸田久吉（故、早稲田大学講師）ら指導の大掛りな集団では野鳥たちもびっくりしたろう、砂防新道からの野鳥の声姿は淋しかった。32種の確認の中に霧の中のライチョウの声のみの確認がある。同行した私への７月26日朝の中西先生の教えでもあり記録でもあったが、後年、これには疑問をいだくようになっている。その後私のみでなく多くの関係者が、やや誇張していうなら血眼になって探し、結局、白山でのライチョウの存在を否定するに至るのである。

第２回白山調査行———昭和30年

薬学で生薬学を学んだ私であるが、この折を機に中西先生に誘われて日本野鳥の会々員になって今に至っている。中西先生の第２回の白山調査（昭和30年）には石川県の同じく野鳥の会々員であった長柄他喜男先生も同行し、北陸放送、北国新聞社の記者(米田満氏)、カメラマンら数名による撮影、録音採りによる記録が初めて行われ、白山で確認された鳥の種類が急に増した。

このときの録音が公開されて、松田衛氏が中宮道ゴマ平にクロジの声を認めた。それまで、本邦の夏山にクロジの確認はほとんどなく、中西先生も松田氏に兜（かぶと）を脱いだ形になった。飼鳥家としての力量に自然探索家としての悟堂先生が屈したことになったとも解されたが、長年、クロジを冬鳥として認識していた鳥学会へも大きな反響だったに違いない。爾後、中部以北の各地の山岳地域に夏のクロジの報告が相次いだ。白山自然保護センターの上馬康生氏も後年(昭和56年)、三方岩岳でクロジの巣を初めて見つけた。

それはさておき、中西、長柄両先生は中宮温泉へあと100mほどのところの岨道で土止めをしたコンクリート壁に落下して大怪我をしてしまった。道案内と警護が医学部十数名（リーダー秋山和也氏）の学生であったことが、どれだけ応急処置を助けたか、随行の報道者たちが電話が辛うじて通ずる尾添の部落まで如何に競い走ったか、当時の交通、通信機構のまだあまりにも不便だった頃を思いだし、ときに今昔の感にたえないものがある。中西、長柄両先生はもう故人、事故後終始、陰でぬかりなく心くばりをして温かく世話をした鈴木秀男氏はのちに(財)日本鳥類保護連盟の重鎮になったが近年引退した。

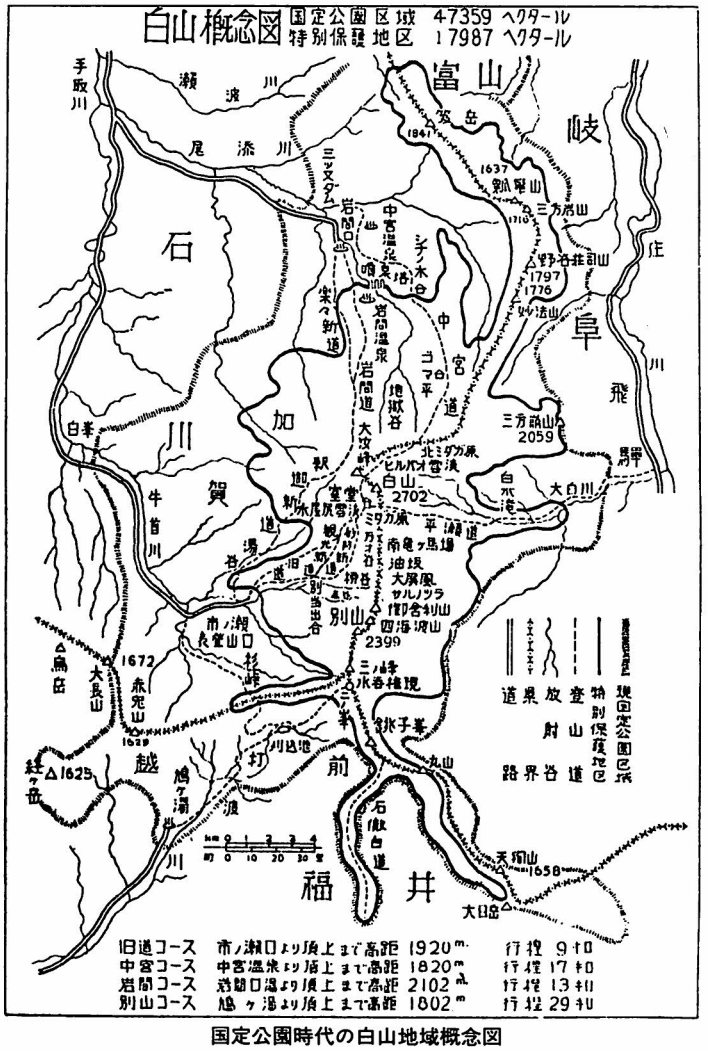
白山室堂での中西悟堂先生（昭和30年）
—長柄朝氏撮影—

第4回白山調査行――昭和36年

第4回の調査は昭和36年6月29日に登った。計画では御前峰に登拝後、別山を経て三ノ峰と二ノ峰間の水呑権現から上小池に降り、杉峠を経て三ツ谷に出るはずであった。石川県は、都市計画課の村田秀作氏を随行させ、北国新聞社、北陸放送からもスタッフが応援し、かつ、毎夕5時には調査一行のために天気予報をラジオで放送するという特別なはからいを受けた。

当時はテント、炊飯などの登山用具が今ほど軽くない。市ノ瀬を朝7時に出発して観光新道を経て室堂には夜8時半頃、辛うじて到着であった。もっとも当時は市ノ瀬は六万橋を渡るとすぐ右側へ登る山路であった。今日のような別当出合までのバス道路は、ずっと後の開設である。随行の石川野鳥の会（日本野鳥の会石川支部）一行は、みな報道記者らと同様30代の若者ばかりだが、一人ひとりが40kg以上の荷によく耐えた。別当出合をでてまもなくにショウキランを見たこと、観光新道の殿ヶ池を過ぎ馬の背を過ぎたあたり、夕日を背に受けてお花畑にまん丸い虹を見たことぐらいしか印象にない。荷はとてつもなく重かった。水屋尻雪渓は弥陀ヶ原までまだ一面の残雪と連なっていたが、暗くなってクロボコ岩にたどりついてからは雷が落ちだし、沛然（はいぜん）たる雨になった。闇が一瞬紫光にきらめき、紫水晶が視界いっぱいだった。稜線がくっきり浮いて闇に隠れる。中西先生は“かみなり様”がきらいで、このときはよほど怖かったらしい。しかし、一行中の誰も自分に落雷があるなどと危惧はしてなかった。経験無しの“めくら蛇におじず”であった。

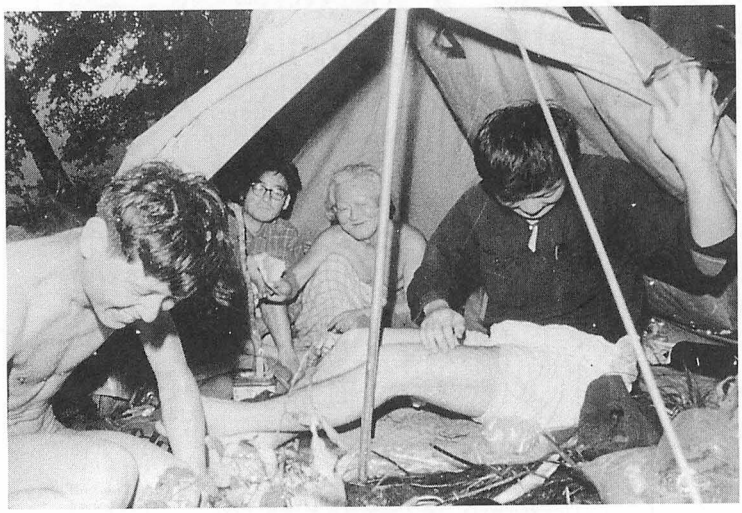
明朝はそれでも雲り空になり、別山へ向った。白山比咩神社の太田辰巳禰宜（現宮司）は真赤な袴の巫女さんと、われわれの姿が隠れるまで、いつまでもいつまでも見送って下さっていたのが今も忘れられない印象である。そのことを繰返し思い浮かべつつ、白山観光協会の玉井敬泉先生（故）にも当時ずいぶんお世話になっていたと、つくづくと感謝の念を厚くするのである。



国定公園時代の白山地域概念図
（中西悟堂著・定本野鳥記6―春秋社より）

ポイヨーという空からの声を中西先生はイヌワシの声だと教えて下さった。雲は次第に低くなり、ぽつりぽつりと降りだした。南竜ヶ馬場への坂道も雪でいっぱいで、ザイルを30mほどもつなぎながら、中西、長柄両先生をそろりそろりと誘導する。どうやら赤谷を降り終えて油坂に登るあたりから雨は本格的になってきて、一行はずぶ濡れになってきた。ここで引き返すべきであったろうが、当時はまだ南竜ヶ馬場に小屋はなかった。ままよとばかり重い荷をあえぎながら天池に着いたのが夕刻、雨の中にクロユリとハクサンチドリが濡れていたのをふっと覚えているが、それどころでない、とにかくテントを張って、もぐりこんでほっとした。一晩中雨、夕方5時のラジオの天気予報は聞こえなかった。

明朝は雨の中を別山に向った。風もひどくなり、ガスが一面で5m前もおぼつかないうす暗さであった。こんな中でもルリビタキがよくさえずっていた。はじめからの雨風の中を別山に向うことは暴挙に等しかったが、そのうち晴れるだろうとの期待である。まさか梅雨前線が停滞しているとは誰も思っていなかった。別山頂上を過ぎる頃から、重い荷の橘和雄(映州、現日本野鳥の会石川支部長)、高崎孜(石川県工業試験場)、吉岡勇(小鳥商)、加茂野吉久（のち陸上自衛隊）ら、設営の若者たちが遅れだした。荷が重すぎたのである。三ノ峰を経て水呑権現までは尾根づたい、後衛は姿も見えず、二人の先生をしゃがませて、その到着を待つ間も寒くて辛かったが、橘氏らはもっと苦しかったに違いない。クロンボ平にもショウキランのかなり大きな群落があり、それに雨の中のベニバナサイハイランがきれいだった。刈込池にテントを張るまで、その他も、私はほとんど記憶がない。その翌日も一日暴風雨で、皆は上下完全に濡れてしまい。男風呂のヌーディスト集団になってしまった。ひとつだけ、のちの中西先生の記録に訂正を申し上げたい。テント内に火がついた話である。ぶあついビニール製のグランドシートの中で、中西先生は濡れた下着をラジウスの火で乾かしておられた。シュラーフザックも毛布もみな濡れて絞るほどだが、先生の毛布だけは乾いた状態になるよう、みんなが心こめていた。加茂野君は疲れていたが、同じテント内に私と先生と三人がたまたまの同室、グランドシートはテントの裾と紐で結んで水の侵入を防ごうとしているので、人が尻を動かしてもテントもシートもだこべこする。ラジウスがひっくり返ったのは先生の動作に応じてのそれであって、加茂野君は隅っこで微動だにせずに熟睡中だったのである。雨の中の火事騒ぎでテントをひっくり返し、



刈込池のそばで野営。手前筆者、一人おいて中西先生（石川近代文学館提供）

ロープを伝って渡渉―打波川上流―
（石川近代文学館提供）

定本野鳥記（中西悟堂著、春秋社刊）

シートの一部を焦がし融かすだけで済んだが、新聞記者方は早速先生をそちらのテントに移した。雨は止まず、偵察にいったところ、打波川は鉄砲水で頭大の石塊が流れて、急流にとんではねるのが目前に見えるほどのすごさであった。その翌日から小降りになりコース変更で鳩ヶ湯温泉に向った。当時はまだ山道で、くずれたあとの岨道や急流の上の一本橋やロープで縄引きのモッコに一人乗りの川渡しなどがあった。

以上中西先生に随行の記憶にたどってのみをここに略記したが、いずれの場合でも先生が唯一のメモ記録者であり、のちに先生主宰の「野鳥」誌への報告、さらには定本野鳥記（中西悟堂著、春秋社刊）に詳細の記録以外にも参加者各位独自の思い出がより深く秘められていることであろう。

おわりに

昭和37年熊野正雄教授（当時金沢大学理学部教授、故人）を会長とする石川野鳥の会（日本野鳥の会石川支部）が発足したし、蒲谷鶴彦、山本徳太郎、百武充各氏ら著名な研究家、野鳥愛好家らも次つぎ白山に訪れて確認された野鳥の数も多くなっていったが、結論的には白山のライチョウはかなり以前から不在になっていたというのがほんとうであろう。日本自然保護協会中部支部、白山学術調査団編「白山の自然」（昭和45年）の私の執筆を最後に、上馬康生氏や橘映州氏を囲むもっと近代的な機器と情報収集による白山の鳥類研究家達に席を譲った。

ただその間、許可を得て、白山の多くの植物標本を採集し、これを金沢大学薬学部標本庫に蔵した。すべての整理分類を完了することなく定年退職したことは心残りであるが、いつか、これらについても記録文献を残したく、今も折をねらっている次第である。紙数に限りあり多くの芳名を誌し得なかったことをお詫びしたい。

（石川県自然保護協会会長）

註）文中の肩書は当時のもの。第３回白山調査は昭和35年に岩間噴泉塔方面で実施した。

中　西　悟　堂　　明治28年（1895）～昭和59年（1984）

金沢市長町に生まれる。本名冨嗣、満二才で父を失い伯父中西悟玄の養子となる。悟玄は仏教革新運動に挺身のち上野東叡山東漸院住職となる。冨嗣も15才で僧籍に入り悟堂と改名。16才で作歌を始め大正５年第一歌集「唱名」を、大正12年第一詩集「東京市」以下を刊行の一方17才より参禅、仏道に精進して、天台宗権僧正となる。更に野鳥の観察を続け昭和９年野鳥の会を設立、会長に就任。国際鳥類保護会議代表に推され、日本詩人クラブ常任理事等公私に亘り活躍。

中西悟堂氏略歴
（石川近代文学館提供）

たより

2年続きの暖冬が終り、白山麓の山々は緑の季節になりました。今年は、4月29日に中宮展示館がオープンし、野猿広場では冬を生き抜いたニホンザルたちが再び元気な姿を見せました。昨年の春に生まれた16頭の子ザルは、全て無事に満1才のお誕生日を迎えました。一方、ブナオ山観察舎は5月20日で閉館しました。野生のニホンカモシカが観察できる施設として、開館中は多くの人達に楽しんでいただきました。山の緑が深くなるとカモシカは草や木に隠れて見えなくなるので、木々が落葉する秋にふたたび開館するまでカモシカとはお別れです。

近年、炭の良さが見直されつつありますが、今回は「炭焼き」についての基本的な事柄を紹介しました。著者の畑尾均氏（33才）は、金沢市近郊で実際に炭焼きに従事している方で、県内では数少ない若手の一人です。

白山麓住民の自然観を紹介していただいた広瀬鎮氏は、動物民俗学の専門家で、これまでにも人と動物との係わりについて多くの著作があります。今回は鳥越村左礫の住民の自然観などを紹介していただきました。今春、金沢大学薬学部を退官された木村久吉氏は、白山の自然保護に長年たずさわってこられ、現在も石川県自然保護協会会長として御活躍中です。数十年にわたる白山とのかかわり等について書いていたただきました。

この3月に「白山麓自然環境活用調査報告書」が当センターより発刊されました。同書は、白山麓の伝統的生活文化（出作り・焼畑・野生資源利用・生活慣行など）について、3か年にわたって調査した結果をまとめたものです。

目　　次

表紙　白峰村の牛首紬……1
炭焼きについて考える……畑尾　均……2
白山麓の自然観を追って……広瀬　鎮……6
白山の思い出—中西悟堂先生らと共に—……木村　久吉……11

はくさん　第16巻　第1号（通巻67号）

発行日　1988年7月25日
発行者　石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23　Tel　07619-5-5321
印刷所　株式会社　橋本確文堂